

# 死んだ千鳥

吉川英治

青空文庫



藪 椿  
やぶつばき

裏藪うらやぶの中に分け入って佇たたずむと、まだ、チチツとしか啼うぐいすけない鶯うぐいすの子が、自分の袂たもとの中  
からでも飛んだように、すぐ側から逃げて行く。

(おや、白い小猫?)

と、見れば、それは七日ななかも前に降つた春の雪が、思いがけなく、双ふたつの掌てのひらに乗るほど、  
日蔭に残つているのだつた。

『——町にも、町の人達にも、春が来ているのであろうに』

家の中に閉じ籠こもつたきりの良人おととの姿は、ちようどそこの一塊かたまりの雪その儘ままな——と彼女は  
は思つた。

墨江すみえの耳には、世間の物音が、羨ましく聞えてくる。藪向うの屋敷でする朝からの稽けいこ  
古鼓つづみや、歌舞伎町かぶきまちの遠い太鼓の音や——。江戸の屋根は、女のつつましさへ何か峻そそるよ  
うに、ほの紅い昼霞ひるがすみにほかされていて、空は飽くまで碧あおかつた。

『御新造様、そこにおいでで御座いましたか。——表の京染屋でございませうが』  
うしろ  
後の声に、墨江はふり願つて、

『ア、菱田屋さんかえ、ちよつと待つておくれ』

露の臺を摘んだ小箆の中へ、藪椿を一枝折つて、それを袂に抱えながら、彼女はわが家の台所口へ戻つて来た。

京染屋の手代は、墨江に尾いて、板の間へ腰かけるとすぐ包みを解いて、

『まあ御覧くださいまし。あの無地のお召が、とてもよい小紋に染上がりましてな。お仕立も、吟味いたしたつもりでございませうが』

『ほんに新し物になりましたね。頭巾のほうは』

『お頭巾も持つて伺いましたが、ただ、お色がちと、派手気味に揚りましたので』

『まあ、よい色ですこと』

『御新造様のお好みは、お渋いうちにも、やはりちと派手気味が御意に召すようでございませう。いや、何ういたしまして、まだまだ、御新造様などはお地味なほうで、世間は派手になるばかりでございませう。路考茶だとか、吉弥臙脂とか、それがあなた様、若いお娘だけの流行ではございませうので』

『これ、ちと声を静かにしやい。旦那様のお耳にふれると、又御機嫌を損じますから』

『あ、御在宅で。……これは何うも』

あわてて腰を上げながら、勘定書かぎつけを出すと、墨江は、

『……一緒に』

と、低声こごえで断つて、その水屋障子みずやしようじをすぐ閉め切つた。

### 西京春信

浪人してからは、米一粒の稼むぎもしていない。無為むゐ、坐食ざしょく、そんな日がもう五年目にな  
る――

『よく過ごごして来られたもの』

と、平田賛五郎ひらたさんごろうも、われながら不思議に思う。

しかも、夫婦共にまだ、どこか以前の氣位けいを持じっていて、そう垢あかじみだ生活せいかつに疲れても

いない。

『……だが、ここらがもう、底の底だろう』

この間から賛五郎は考え初めていた。沈湎ちんめんと腕拱くみした儘まま、いつぞやの雪の日からまだ下駄げたを穿はいて一步も外へ出ていなかった。

——その雪の日であった。

この江戸へ来てから知己しりあになつた浪人仲間の友達が三、四人打ち連れて来て、

(どうだ、貴公も行かないか。ぜひ一口入れ。吾々が世に浮かび出る千載せんざいの一遇ぐうが来たのに、その機会を逃のががすなどという法があるものか。——なあ御新造、そうじゃないか)

と、いう熱心な勧め方。

良人の友人達から、そう云われると、墨江は、良人以上、乗り気になつて、

(そういう事なら、ぜひ共、主人もお加えくださいませ。とかく良人たくは引ひつ込み思案しあんで、今日迄にも何遍なんべん、仕官の口を外はずして居りますことやら——)

などと口を極めて云つた。

それ程迄に、妻も云うので、

(行こう、今度は)

と賛五郎も遂に、同行を約した。

出発は二月初旬。もう日は迫っている。

江戸表から立つ仲間は、ざつと十名ぐらいになるだろうとの見込だった。そして、約二カ月程、京都の竹林院の道場で稽古けいこを励みはげ、そして悠々、静養の上で、四月下旬の三十三間堂の競いきそ矢やに立つという予定なのである。

浪人仲間の一部で、

(世に浮かび出る時が来た)

と云っているのは、寛永かんえい、正徳しょうとく以来、ここ五、六十年間の通し矢は、御三家や各

藩士の間でばかり競技が行われて来ていたが、今度は、遍あまねく天下の隠れたる弓仕ゆみしに、あの曠はれの場所が与えられ、藩士以外の上手が見出される事になったのを歡んでいるのだった。

(——時節が来た)

平田賛五郎も、はつきりとそれを感じている。彼とても、妻の云うように、決して、引つ込み思案が天性ではない。

いや、男の沈ちんめん湏めんには、妻以上の鬱うつぼつ勃ぼつがつつまれている。

——だが、さし当って、その仲間へ加入して京都へ上のぼるには、どうしても、四、五十

両の金は入用だった。三十三間堂の堂衆や帳前ちようまえという役目の者に、心付けも要るそうであるし、加入金は二十両はどうしても調べて行かねばならないととの。その他、路銀、身支度、逗留費なども、今の手許では、一両すら出来るあてはない。

(そんな事仰つしやつていては、生涯、仕官する途はつきませぬ)

墨江はそういうが、それでは、金をどうするかといえ、それは勿論、彼女にも何の成算はないのである。

彼女はただ——女ごころに——殊にそういう曠れがましい事は好きだし、又性来せいらいが勝気だし——一面には又、浪人して出て来た故郷元くにもとに対しても、ここで良人が、名誉を世に揚げてくれればという射倖心しゃこうしんも手伝つて、

(お金などは、ほん気になつて、工面しようと思えば、どうにでもなるではございませんか)

と、良人の沈むほど、彼女はそれを励ます気になつて、何でもなし事のように云い断つた。

——然し、雪の日からもう七日経つたが、坐食の浪宅には、経済的には何の変化も起らない。



四、五十両の金はおろか、一日一日の糧さえ今では窮<sup>きゆう</sup>迫<sup>はく</sup>していた。有る物はみんな売り尽していた。品物を金に代えては喰べて来たのである。裏藪<sup>とら</sup>に生える露<sup>とつ</sup>の臺<sup>とう</sup>の菜にも、この冬は喰べ飽きた。

髀<sup>ひにく</sup>肉の嘆

『——藪椿<sup>ありあわ</sup>ですけれど、こうして挿<sup>さ</sup>すと見られましょう。お机の上にも置きましようか』  
有<sup>あり</sup>合<sup>あ</sup>せの小<sup>か</sup>さな瓶<sup>め</sup>に、一輪<sup>いちりん</sup>投<sup>な</sup>げて、墨江<sup>すみえ</sup>がそこへ持<sup>も</sup>つて来ると、

『何<sup>なに</sup>だ……花<sup>はな</sup>か』

と、良<sup>き</sup>人の賛<sup>しょう</sup>五<sup>ご</sup>郎<sup>ろう</sup>は、興<sup>きよう</sup>も湧<sup>わ</sup>かない顔<sup>かほ</sup>つきで、ただ腕<sup>うで</sup>拱<sup>こ</sup>みの手<sup>て</sup>を解<sup>と</sup>いて、火鉢<sup>かひつ</sup>のふちへ置<sup>お</sup>き代<sup>か</sup>えただけだつた。

花<sup>はな</sup>では、今<sup>いま</sup>の彼<sup>かれ</sup>の心<sup>こころ</sup>は、慰<sup>なぐさ</sup>められなかつた。

『あなた、ちと戸外<sup>おもて</sup>でも歩<sup>あ</sup>いて来<sup>き</sup>てはいかがですか。雪<sup>ゆき</sup>も解<sup>と</sup>け、道<sup>みち</sup>も乾<sup>かわ</sup>いておりましよう。

それに、今日あたりはもう、ほんに春が来たという気持——少し歩いておいでなされませ』

『——何しに』

『お気持が晴れましょう』

『おれは、そんな暗い顔つきか』

『でも……毎日こうして居らっしつては』

『もう、諦めてあきらている！ 何も鬱くよくよ々よしていないつもりだが』

『諦めるには早うござります。あなたもまだ三十台、わたくしもやつと二十六。お互いに、これからではございませぬか』

『年の事じゃない。今度の通し矢の話だわ』

『それも、お金さえ工面がつけば、いつでも上のほ落れる事ではございませぬか』

『いつでも？ 馬鹿な。御一同の出立はもう明後日あさって。それまでに支度が調わねば、面目ないが、落伍らくごするほかはない』

『ですから、その明後日までに』

『たわ言も、よい程にせいっ。その明後日までに金が調う位なら、こうして、髀肉もの嘆を洩もらしながら、閉とじ籠こつて居りはしない』

『坐まつていて、お金のできる氣遣きづかいはございませぬ』

『まだ云うかつ。では、外を歩いていたら金ができるか』

『一心になつて、何ぞ、無い考えでも出そうと思えば』

『世間はそんな物じゃない。——墨江』

賛五郎は膝ひざを向き代えて、

『そういうお前は、言葉の裡うちらで、良人のおれが、こうして無策むさくな顔しているのを冷笑わらつて  
いるのであろうが』

『ま、そんな皮肉にお取りあそばして』

『いいや、おれの身になれば、おまえの言葉も、耳に痛い木枯こがらしのように辛く聞える。

おれだとして、何日いっまで朽ちて居ようか。しかも、今度のようない浪人ろうにん生活くらしだ。もう、その事に

の出るほど残念だが……金となつては、どうしようもない浪人ろうにん生活くらしだ。もう、その事に

就つては、云うな、云つてくれるな』

『けれど、今度お上洛のぼりになる沖田おきた様も伏原ふせはら様も山口様も、皆、御浪人のうえに、日頃

のお暮しとて、私たちよりもつと貧しいお方さえあるのに』

『伏原も小網町の魚問屋に身寄みよりがあり、山口も妻の里方がどうかなる家柄だからだ。おれ

達夫婦には、この江戸表に一軒の縁者もありはしない。有るのは、旧藩の江戸詰づめの知辺しるべだが、故郷元くにもとを追われたおれ達夫婦の事情を知っている奴等やつらが、一両の合力ごうりきもしてくる筈はなし——又そんな所へ恥曝はじさらしをして迄、出世あぐせくに促せしたくもない。——ええもう、云うなというのに、諄くどい奴だ』

賛五郎はごろりと横になつて、世に入れない鬱々うつうつとした顔を、手枕てまくらにのせて眼を閉じた。

『平田殿。——居らつしやるか』

門口の声に、

『お、伏原様に庄司様しょうじ、お揃いで——』

と、墨江はすぐ、出迎えて、

『あなた、いつぞや雪の日においで遊ばしたお仲間のお二方が』

良人にも告げて、敷物をそこへ並べると、賛五郎は懶ものうげに起き直つて、

『先日、仲間一同の前では、ついどうかなる気で、ああ約束してしまつたが、弱つたなあ、何と違約の詫わびをしようぞ。……』

眩つふやいている間に、浪人仲間の客の二人は、浪人交際つきあいらしい打解けた挨拶のうちに坐り

込んだ。

そしてすぐ、勝手元の墨江の方へ、

『御内方。鴨を一羽提げて参つたのだが、何と、酒と鍋の物の支度をしてくださらぬか。明日となつては気忙しいから、明後日の門祝いをやってしまうのじゃ。……どうだ平田殿、いい鴨だろうが、飲めるぞこいつは』

と、伏原半蔵という四十がらみの浪人は、縄で提げて来た鴨の首を高くさし挙げて笑つた。

### よく似た男

青物屋とか酒屋とか、ちよつと其処らへ小買物に出るのでも、彼女は身綺麗な寝みを怠らなかつた。いや、貧しくなればなる程、墨江は細心に、薄化粧や襟元に気をつけた。若いし——縹緞は優れているし——それに世間摺れていないので、零落れてもまだ多

分に、五百石取の若奥様だった香いが仄かである。

『じゃあ、すぐ届けておくれ』

酒屋でも青物屋でも、彼女が鷹揚おうようにそういえば、何処でも、

『へい、すぐお後からお届けいたします』

嫌な顔をする店はなかった。

その癖、去年の年暮くれの払いも、まだ滞とどこっている程だったが。

墨江は、そういう世間が世間だと思っていた。そのうちには良人が仕官する。支度金が下がる。——だから例え質屋の門を潜くぐつても、元の品位と権式だけは捨ててはならない。

そう信じていた。

それにつけても今度の機会は惜しい。

良人の平田賛五郎は、元々、弓仕の家筋の人なのである。賛五郎の実兄の平田文吾ぶんごは、現在でも熊本の国許もとで細川家の弓道師範もとをしており、禄高ろくだか四百石、日置流へきりゆうの弓では九州でも並ぶ者ならぶのない人だが、賛五郎はその兄をも凌しのぐ上手だといわれていた程だった。

(口惜くやしい。——何としても)

彼女は、良人びいき鼻負びいきな気持ばかりでなく、そういう良人を持ちながら、今度の三十三間堂

の通し矢に出せないかと思うと、自分のせいのように、まぶた瞼が熱いものに霞んでくる。

国表あにの実兄や親戚へ云つてやれば——とも考えるが、日数の程が間にあうまいし、又、日数があつても、金子きんすの頼みなど、受け付けてくれる身寄はないかも知れぬ。

(不義者の果てが、よい態ごさまな！)

(御勘ごかん気の者に、一切かま関うな。関うては、藩の御法を犯すことになろうぞ)

遠い国許にいる知辺しるべの顔が、みな嘲ちやう笑しやうの齒を向けているようにひが僻ひがまれる。いや僻ひがみではない、当然そう思われているに違いない。

(わけても彼あの——大牟田公平おおむだきんべいが)

大牟田公平の事を考え出すと、彼女は昼間の町中でも、思わず背を振向いて、何かに狙つけられているような眸まなこをした。

賛五郎がなければ、当然自分は、公平の妻となっていた体である。

大牟田家では、自分と公平との結婚を、藩庁まで届け出してあつて、折を待っていたのであつたが、その間に、恋はあらぬ人と結ばれてしまった。

こういう場合——藩の法規は、当然、自由な恋愛から生れる結婚などは認めない。風評が立つと共に、

(御勘気。——放逐)

の嚴命が、恋の凱歌と取り代えに、替五郎の身に降った。

(彼の公平が、あの儘黙つて、国許で他の妻を持っているかしら? ……)

裏切つた男の恐い顔つきが、絶えず後から来る気がして、墨江は髪の毛が寒くなる。

——今も。

酒屋や青物屋へ届け物を吩咐けておいて、家の方へ戻つて来ると、露地の曲がり角に、

一人の武士が佇んでいる。

遠くから姿を待つて居たように、その男の編笠は、墨江の方を正視していた。

『……あつ?』

気のせいか、墨江には、その編笠の背恰好が、今もふと、胸の中で嫌な気持ちに思い出

されていた大牟田公平そっくりに見えた。

あわてて、彼女はべつな横丁へ曲がつた。足のくろぶしがわくわくして、振向いて見る

勇氣もなかつた。道を廻つて、藪つたいに、わが家の台所へ戻つて来てから、初めて、

『……あんなよく似た人があるかしら?』

と、呟いて、もいちど藪の中を見廻した。



## 断念

鴨の肉がわずかに皿に残っている。

もう酒とも呼ばない。

主客三人とも、充じゆうぶん分、酔いがまわっている様子で、

『まだ二日あるのだ、何とか工面がつかぬか。ええ、おい平田うへじ氏』

伏原半蔵が云うと、連れの庄司隼太しゆうじはやとという男も、

『高利貸に知辺しるべはないのか。抵てい当とうと云うたら、この首で貸せというのだ。その位、押し

強く出なければ、金策などは出来るものか。大体、こここの夫婦は、ちとおとなし過ぎる』

と、楊枝ようじで齒をせせりながら云う。

賛五郎は、酔わない振りを努めていたが、笑い声の底に、悪わる酔よしている淋しい響ひびきが  
あつた。

『あはははは。まさか、首を抵<sup>かた</sup>当に金も貸すまい。——他<sup>ほか</sup>の御一統には、面目次第もないが、貴公たちから、違約の罪、よろしく詫びておいてくれ』

『残念だなあ』

と、伏原半蔵は長嘆して、

『通し矢の射手<sup>いて</sup>に立って、名乗りをあげるからには、各自信たつぷりだが、おれ達の仲間では、まず今度の名誉は、平田賛五郎に取られるだろうと定評しているのに、その貴公が、金の為に、断念するなどは、返す返す惜しい事だ。——御内方<sup>おうちかた</sup>、御内方』

『はい……』

墨江は行燈<sup>あんどん</sup>をそこへ持つて来て、客の間に坐<sup>ま</sup>った。

『もう少々、お爛<sup>つつ</sup>けいたしましょうか』

『いやもう酒は充分。……酒どころじゃないその……金子の方き。五十両ぐらい、何とか調<sup>ととの</sup>わんものかなあ』

『私も、心を砕<sup>くだ</sup>いておりますが』

『心を砕くとは……それは家の中にいて思案している事じゃござらぬか。あははは、あんた方御夫婦は、まるで内裏<sup>だいりびな</sup>雛<sup>ひな</sup>みたいに、貧乏しながら超<sup>ちようぜん</sup>然と澄まし込んでいるから

いけない。——金を作るには、もっと、面の皮を厚うして、世間へ實際にぶつかって、嫌な思いも、気位も、捨ててかからにやあ出来はせん』

『そう私も、良人へ申しているのでございませう』

『平田氏の性格では出来まいなあ。こういう際には、やはり女の内助の力に待つほかにいて』

『……そのわたくしが、意気地がないので、お恥しゅうございます』

『儘になるなら、自分は退いてもよいから、平田氏を三十三間堂へ立たせてみたいが、実は手前も、明日の晩、頼母子講の金を競り落して、それを懐中にして立とうというあぶない算段……うまく落ちてくれればよいが、さもないと』

半分独り言のように云いながら伏原半蔵は、眼の隅から墨江を見て、

『御内方には、頼母子講のようなものに入っておいでないのか。月々、懸金をして、何ぞの場合に纏めて取る無尽と申すあれなどには』

『ええ、つい、そのような平常の心懸けも……』

『いや、お二人共、お若いのだから無理はない。——だが、その若い者こそ、世の中へ出してやりたいものだな。三十三間堂の通し矢で、名誉の額でも揚げれば、あわよくば御帰

参がかなうかもしれぬし、又御帰参がかなわぬ迄も、諸侯から仕官の口は屹度かかつて来るが……』

『止してくれ。……もう止してくれ。おれは大小をすてて、算盤そろばんが持ちたくなつた。……金の工面のつかぬ身で、わずかな額に、金々と云っている程、自分の浅ましくなるものはない』

賛五郎は、そう云い放つと、酔よいに耐えないように、御免ごめんといいながら横になつてしまつた。

『どれ、吾々もお暇いとまとしようか。……いやもう関かまわずに。……それより御内方、風邪かぜをひかさぬように、平田殿へ何ぞ掛けてあげてくれ』

伏原半蔵は、土間の履物はきものを足の先で探りながら、手をつかえている墨江の顔を、無遠慮な眼でながめて歸つた。

影さす女めがたき髻

——お見送りの出来ないのがただ名残り惜しゅうぞんじます。けれど金子は、明朝御出立のまぎわ迄に、必ずお手許まで届けさせます故、家事など此儘、後顧なく御上洛くださいまし。

五月、御吉報の矢文を、東の空でひたすらお待ち申してのみ暮しております。委細はやがて分る日が参りましょう。

すみえ

旦那さま

ゆうべ客の帰らぬ間に、転寝した儘だったので、賛五郎は夜明け方に、もう眼をさました。

——ふと、枕元の水差へ手をのぼしかけると、盆の端に、この置手紙があつたのである。

『あつ、では一途に……ば、ばかな、何の的があつて！』  
 刎ね起て、彼は何という事もなく、家の中を歩き廻つた。

新しく染めた小紋の着物がない。頭巾もない。——やはり外へ出て行つたに違いない。

『世間見ずが、世間へ出て、しかも、大枚の金策をして来ようなどは、愚も甚しい。金というものが、そんな単純な物なら、何も苦勞をする人間はない。——墨江にはまだ、ほんとの貧乏も金の恐さも分つていないのだ。——馬鹿、馬鹿め』

壁へ向つて、賛五郎は罵つた。

磯辺の貝や小魚に戯れていた子が、興にうかれて沖へ遠く歩み出して行つたような——愛するが故の怒りが——堪らない不安になつて賛五郎の胸を躁がせた。

『無智にも程がある。生き馬の眼を抜くという言葉のある都会を何とと思っているのだ。……ああ、はやく空しく帰つてくれればよいが』

朝飯も食わずに、彼は、戸外の登音ばかり気にしていた。

午を過ぎてても、墨江は帰らなかつた。これは放つておけないと賛五郎は考え出し、大小を落すと着流しのまま、家の露地から出て行つた。

角の煙草屋の老婆が、姿を見て、薬研の側からあいさつした。賛五郎は水府のたまを一つ求めながら、軽い言葉で訊いてみた。

『ゆうべ酔いつぶれて、寝坊していたので女房の出て行くのも知らなかつたが、今朝方、家内の姿を見かけなかつたであろうか』

『御新造様でございますか。……さあ？ 御新造様はお見かけいたしませんでしたが、ゆうべから、お宅様の露地口に、どうも気になるお人が立っておいりましたので、よほど、そつとお知らせしようかと思つていたのでございますよ』

『何？ 露地の角に。——してそれは女か、男か』

『編笠を被<sup>かぶ</sup>つたお武家様で、わたくし共へも立寄り、煙草をお求めなされて、いろいろと、お宅様の様子など訊きますので、不<sup>ぶ</sup>気味に思つて居りましたところ、一度何処へか立ち去つたと思うと、又ゆうべも来て立っているではございませぬか』

『はての？ ……。年齢は』

『ちようど、旦那様ぐらいなお年頃で、背は、もちつと高く、薄<sup>うす</sup>あばたが顔にあつて、ずんと、田舎くさいお武家でござりましたが』

『えつ、薄あばたのあるわし位な年頃の侍だと。して、袖の紋は』

『御紋は気がつきませんでした、言葉の訛<sup>なま</sup>りが、何処やら旦那様のお話し振とよう似ておりましたか』

『あつ……』愕<sup>がく</sup>然<sup>ぜん</sup>としたように——然しさりげなく、

『そうか、いや有難う』

賛五郎は半町ほど夢中で歩いていった。

(大牟田公平だ。——薄あばたがあつて熊本訛りのある同じ年頃の侍といえ、あの公平に相違ない！)

暴風あらしのように、種々さまざまな想像がわき上つてくる。

機おりも機でもある。

『……さては、いつの間にか、彼奴きやつと文通を交かわして、再び元の男の手へ逃げ帰つたのではあるまいか』

そう邪推じやしういもできるし、

『いやいや、彼女あれに限つて』

と、今朝の置手紙の真心らしい文言もんごんを思い出したり、日頃の墨江を考へて打ち消してもみる。

然し、どつちにしても、かねがね彼あのまま指を啜くわえて黙視もくししては居まいと考へていた大牟田公平が、出府して、自分たち夫婦の居所を突きとめているからには、これはもう、無言の果し状をつけられているのも同様である。

(女讐めがたき！)



と、彼は自分達をさして呼ぶだろう。あの凄<sup>すこ</sup>い相<sup>そう</sup>貌<sup>ぼう</sup>をもつて、妻ばかりでなく、自分をも、併<sup>あわ</sup>せて尾<sup>ね</sup>狙<sup>ら</sup>っている事は相像に難くない。

『……もしや？ そうだ！ もしや出先で妻の身に』

不安は彼の足を自<sup>ひと</sup>でに迅<sup>はや</sup>めさせた。物に追われるような眼いろを持って、その眼は又、妻の姿を探し歩いた。

## 落ち札

『……さあ、ちとお話が御無理でございますな。ただの屋敷奉公では、前<sup>ぜん</sup>借<sup>しゃく</sup>などという事は計つてくれませんし、前借のできる勤め奉公では——お茶屋、湯女<sup>ゆな</sup>、船宿<sup>ふなやど</sup>、その他、水商売など種々<sup>いろ</sup>ございますが、それもせいぜい年三兩か四兩くらいしか貸してはくれませんので、あなた様の仰つしやる五十兩などというお金は、どうしても、遊廓<sup>くるわ</sup>より他には貸してくれる所はございません』

樋屋つちやという周旋屋の手代はそう云つて、じろじろと、墨江の横顔や身装みなりを眺めながら、又云つた。

『そうそう、番町の或る御大身の御隠居でございしますが、そこならば、都合に依つては、二十両や三十両のお支度金は出して下さるかも知れませんが、如何でございしますか、そんな傭口くちへ、ひとつ、お見得めみえなすつて御覧なすつては』

『そこは、お屋敷ですか』

『左様でございします。お名前は、御相談の成る迄申しあげられませんが、さる御旗本の御隠居様でございましてな』

『御用向は、どんな事をいたすのですか』

『へへへへ。それはもう、二十両とか、三十金とかいう、大枚たいまいのお支度金を出そうというのですから、云わずもがなで、お分りでございしましょうが。——つまりその、お大名でいえば、お部屋様という格で』

『ええ、お妾めかけですか』

墨江が、顔色を変えたのを、周旋屋の方では、却かえつて、呆あきれたような顔つきだった。逃げるように、彼女はそこの暖簾のれんから往来へ出て来た。

何処の周旋屋へ行つても、同じような笑いを浴びるだけだった。彼女は、自分の持つてゐるものが、貞操ていそう以外は、誰も相手にしてくれない事を知った。

同時に、貞操の市価を墨江は知った。世間というものが急に暗黒の表にしか見えなかった。市価づけられた一日の経験に、浅ましくて泣きたくなつた。

『……だが、良人の為なら』

ふと、そんな魔がさして、身ぶるいのような想像もしてみたが、さすがに、そこ迄は、自分を——いや良人の面目を——捨てきれない気持もする。

『そうだ。……伏原さんに手について』

墨江は、ゆうべ鴨かもを提げて訪ねてくれた、良人の友達の一人を思い出した。沢山な浪人仲間のうちでも、あの人はわけても誠実で親切らしい。ゆうべ、帰り際に、暗示きざのような言葉も洩もらした。

（今夜の頼母子講の金が取れば——）と。

もう町には灯が燈ともつていた。伏原半蔵の間借りしている紺屋こんやの二階を訪ねてみると、『今し方、伏原さんは、永代河岸えいたいがしの更科さらしなへ行きましたよ。へい、毎月の頼母子講で、いつも蕎麦屋そばやの更科と場所はきまつて居りますから、多分そちらでございましょう』

と、紺屋の職人と女房が云う。

墨江は一心だった。見得も外聞もなかった。すぐ教えられた更科蕎麦へ行ってみると、なるほど成程、沢山な下駄や草履ぞうりが土間に脱いであつて、医者、浪人ていの男が二人、彼女の姿をじろじろ見ながら二階へ上つて行つた。

小女に呼び出してもらうと、伏原半蔵は、その梯子段はしごだんから降りて来て、

『やあ、誰かと思つたら』

と、意外そうに云いながら、汚ない草履を突ツかけて、河岸へ出て来た。

少し酔つてゐるらしい、伏原は赤ら顔をしていた。大川の縁ふちにしゃがみ込んで、何の用事で来たかというように、墨江が口を切る迄、黙つて小石を弄もてあそんでいる。

『……伏原様つ、わたくし、今夜は思い余つて、一生のお願いに参つたのでございますが』

墨江は、突然、嗚咽おえつするように訴えて、白い指先を地へつかえた。

『何ですか一体……。この半蔵にそんな願ひがあるというのは』

『厚顔あつかましい女と、きつと、御立腹になるかも知れませぬが……。もしつ、生涯、夫婦が御

恩に着ますから……』

『ははあ、分りました。頼母子講の金を、その儘、貸してくれという事ですな』

『虫のいい奴と、さだめし、お蔑みでございませうが、良人を世に出したいのでござい  
ます。良人も、あなたのお気持を知れば、死を賭しても、きつと京都の通し矢で、一の額  
を上げずにはおきませぬ。彼の人は、元々、弓の家に生れているのです。お兄上は、細川  
家で四百石の御師範、もし、京都の通し矢の事が聞えれば、御勤気も免れ、五十両や百両  
のお金は、その上ならばどうにでもなるお家からでもございます。決して、あなた様に、  
御損失はおかけ致しませぬ程に……』

『まあ、待つて下さい。成程、昨夜お邪魔に伺った時、それとなく、御融通してもよい  
ような事は云ったが、何しろその金はまだ握っていない話の事だ。——これからちようど、  
その無尽の競り札が始まろうというところ、身共の手に、首尾よく札が落ちたら、その上  
で御相談しようではないか』

『どうぞ、お願いいたしまする』

『じゃあ、どこかその辺で、待つておいでなさい。もう、顔も揃ったし、入札はすぐ済  
むから』

平常、彼女が思っていた通り、やはり伏原半蔵は優し気のある人だった。年は四十を越  
え、無頼な浪人仲間に身過ぎはしているが、今の言葉でも、友誼に厚い事はわかる……。

そんな事を考えながら、彼女は、いくらかほつとして、暗い河岸ぶちに佇んでいた。袂から頭巾をだして顔をつつみ、川波の音に耳を澄ましていると、春の闇を、千鳥の声が寒々と空を横切つてゆく。

『まだかしら？ ……』

何度も、何度も、墨江は更科の二階の燈を振り仰いだ。その障子には、大勢の影法師が映して、時々、笑いくずれる声が往来まで流れてくる。

『…どうぞ、伏原様に、今夜の競り札が落ちますように』

彼女は、心のうちで、凝と祈った。

### 死ぬ千鳥

——やがて、四、五人ずつ、そろそろと更科の軒から人影が散って行った。散会らしい。札の結果はどうなつたろう。墨江は動悸を抱きながら、人目にかからぬように、わざと川

下流わしもの方へ、ぶらぶら歩き出していた。

『——平田殿の御内方。——墨江どの』

早いはや登音が、迫つて来た。

伏原だった。その顔つきを見ると、墨江は何か直感した。

『よろこ欣んで下され。——札が落ちた。金もこの通り』

封金を幾つか入れた重そうな財布を出して、墨江に見せた。そして歩き続けながら、

『とにかく、先程さきほどのお話の件だが……路傍みちばたでは人に怪しまれようし。……そうそう、

蒟蒻こんやくじま島で知人しりびとが、出合茶屋であいちやをかねた船宿をしておるから、そこ迄、お越し下さらぬ

か』

河岸ばかり多い暗い道は、墨江にとつても却きやつて気易やすい心地がした。

伏原の案内した家も、船宿構えの静かな家で、店には小女と眼まなこの疾わるそうな老婆しか居な

かった。

『ここならば、何をお話しなされても、決して心配はない。聞えるのは、裏川うらがわの櫓ろの音ばかりで……』

四畳半の片隅に、朱骨しゅぼねの行燈あんどんが夢のように燈っていた。酒さかな、肴さかなをとつて、伏原は飲

み初めた。そして、墨江にも杯をすすめたが、墨江は、下に置いただけで、身をかたくして坐っていた。

『じゃ、茶漬でも』

伏原は、あつさりど、食事にして、小女に膳を片づけさせた。それからやつと、伏原は、話を切り出して、財布のうちから、黙って、五十両出して、彼女の手へ渡した。

『……えつ、じゃあこのお金を』

墨江は、咽むせび泣いてしまった。どうあろうかと案じていた胸の凝こりが、いちどに解けて、見得みえもなく、両手をついて欣うれし泣きに云った。

『伏原様、この御恩は死んでも忘れませぬ。きつと、この恩は……』

ぽんと、煙管きせるを下へ捨てて、伏原はその襟あしを見ながら笑った。

『あははは、何も、そうお礼にやあ及ばない。身共みどもとても、あなたに掌てをあわせて拜まれる程な神や仏じやないのだから』

『でも……折角せつかく、あなた様にも、京都へ上落のぼるおつもりで落札おとしたお金でございませうに』

『その意気は、お分りでござらうな』



『はい……お察しいたして居りまする』

『金はわずか五十両だが、その金は、身共に取つても、平田殿の望みと同様に、出世の足あ懸しかりにしようと思つていた金だ。……それをお譲りするからには、いわば男が、生涯の立身を犠いけにえ牲にして、おん身に未来の華はなを譲つたも同じわけだ』

『……すみませぬ。……そう仰たんつしやられては、何やらこのお金も』

『いやいや、もう、武士が一旦たん、貸したと云つて手から放した金。戻されても受取れはせぬ。遠慮なく役立ててもらいたい』

『わが身ながら、余りといえ、厚あつかま顔しいお願い事をして、この御恩義をどうしてよいか分りませぬ』

『墨江殿……』と、伏原はずつと寄つて、いきなり彼女の рукくびを握つた。

『——未来の出世をお身に譲つた男の願いを、お身も、かなえて下さるだろうな』

『えつ……』

さつと、色を失つて、墨江が後退あしずさると、

『卑怯な!』

と、伏原は男の力で息づまる程、その顔を抱きすくめた。

『男の未来を犠牲にさせて、この儘、戻ろうなどと考えておいでたのか。さりとは、浅慮な。……実を云えば、恥しいが、人妻のあなたに、この半蔵は日頃からやる瀬ない思いを焦していたのでござる。身共も、未来を捨てて、あなたに上げる物を上げた。——当然な事だ！ 拙者もあなたから求めるものを求めるのだ！』

『……もしっ！ ……もしっ！ ……伏原様。……伏原様。いけません！ ……待つて、待つて。良人のあるわたくしの身、良人に、良人に……』

× × ×

薄暗い出合茶屋の店先では、奥の客を忘れたように、老婆の仲居と小女が、帳場筆筭によりかかって居眠りしていた。

『……』

川風が、門暖簾を揺りうごかす。——その暖簾のすそに、そつと佇んだ草履が見える。侍とみえ、革足袋を穿いて。

『……御免』

低い声で、暖簾の間から、侍はそう云つてみたが、小女も老婆も、うとうと、快げに

居眠っているのです、黙って、傍らの木戸を自分で開けて、中庭へ忍び足に這入って行った。

×

×

×

×

『……墨江、行燈が消えている。……行燈を灯けたらいいだろう』

伏原半蔵の声である。

四畳半の闇の裡に、ほんの一瞬の時が経つと、伏原の態度は、言葉つきまで、その前とは、まるで打って変っていた。

『……………』

『何をしているのだ、畳を撫でて。……櫛か、櫛ならここに落ちている』

伏原が、投げたのであろう、真つ暗な畳の上に、櫛の音が躍った。

病人のように疲れた白い手が——その櫛を探って、自分のみだれた髪を撫でていた。墨江の息づかいも、黒髪のように乱れていた。ひそやかに身づくろいを直している衣ずれの音が、かなり長い間だった。そして程なく、闇の中に、二人はしいんと黙り合ってしまった。

『……行燈をつけぬか、行燈を。——何ももう、済んでしまった事だ、恥かしがるにも及

ぶまいが』

『……………』

『え、墨江』

『……………わたくし……………わたくしはもう、帰らせていただきます』

まだ戦慄せんりつのやまないような声で、墨江が云うと、伏原半蔵は、冷淡な投げ調子で、

『帰る？ ……そうか、帰るなら帰れ。……………だが、今渡した五十両は、こっちへ戻して貰うかな』

『げッ……………あ、あのお金は』

『あの金は、僅わずかの物に相違あるめえが、僅の物を返せというのに、何を恟ぎよツとしているのだ。よこせ、此っ方ちへ！』

『……………では！ ……では伏原様、あなたはわたしを、騙したのですか』

『知れたこった。不服なら、何処へでも訴えろ』

『まあ！ ……あ、あんまりですつ。く、くやしい！ ……』

『この辺は、小千鳥の名物だ、まだ出合茶屋も宵のうちだし、たくさん泣いているがいい。

……………どれ俺は一足お先に』

泣き伏している彼女の胸の下から、先に渡した金を捲き取って自分の懐中に入れ直す  
と、せせら笑いしながら、伏原はすつと其の室を出て行った。

——今し方、入口の暖簾先に佇んでいた侍が、中庭へ這入って行ったのと、伏原がその  
家の裏口からそわそわ立ち去って行ったのと、ちやうど入れ交いぐらいな時間の差であつ  
た。

『……ア！ しまつた』

中庭の闇へ、編笠をかなぐり捨てた侍は、その四畳半を撫でまわす途端にそう叫んだ。  
もう、彼女の啜り泣きは、永劫にやんでいた。——俯つ伏した黒髪は、血しおの中へ、  
べつとりと乱れ、手はかたく懐劍の柄を握っていたのである。

追いかけて

平田賛五郎は、茫然と、家に帰って来た。(ひよつとしたら?)

と、空想して帰つて来たが、やはり妻はあの儘、家に戻っていない。

彼が一日歩いた先では、殆ど何の手懸りもなかった。

『……アア』

疲れた体を投げて、賛五郎は、空虚の中に寝ころんだ。——そしてふと、意外な物を机の上にもふと見出した。おととい——彼女が裏敷から一輪切つて活けた藪椿の壺のそばに——

『やつ、金だ』

封金で五つ。

紛れもない正金である。五十両の金は、妻の血の結晶のように彼には見えた。熱いものがとめ途なくその眼からあふれた。

『どうして?』

と、彼は妻の苦衷をさまざまに考えてみた。——然し、そう思い感うよりも、妻の希望に向つて、慕しぐらに進むべき自分の重荷をすぐ感じた。

夜が明けると、平田賛五郎はもうかいがいしい旅仕度を身に着けていた。他の仲間もきよう品川の八ツ山下に落ち合つて、そこから打連れて京都へ立つ約束になっている。

少し、時刻に遅れたので、賛五郎が八ツ山下へ来てみた時は、もう一同の姿はなかった。然し、足を速めて行くうちに、品川宿と大井の間で、一行十名ほどの仲間のすがたを、並木の彼方かなたに見出した。

『おうーいつ』

賛五郎が手をあげて、追いついて行くと、立ち止まった仲間の者は、皆、

『おや、来られないと云った平田殿が来たわ』

と、意外な眼をして、彼を迎えた。

その中には、伏原半蔵もいた。

半蔵の顔は、ちよつと、青ざめて、眼の底にも狼狽うづたの光が走ったが、他の仲間と、磊ら落らくに笑い合っている賛五郎の様子をながめて、次第に安心して来たらしく、

『よう来られたなあ、平田氏うじ——貴公きこうが加わらない事は、実に遺憾いかんだと、今も道々、話していた所だった』

などと云つたり、

『急に御金策ができたとは、何としてもめでたい。さだめしあの御内方の優しい御内助であらうなあ。……いや、平田殿は果報者かほうものじゃよ、この中では、いちばんよい女房を持つ

ておる』

などと、要らざる事を、頻りに喋舌りかけながら歩いた。

大井の茶店でいつぶくして、浜並木へ一同がかかった時である。——後から頻りと平田賛五郎の名を呼ぶ者がある。誰か？——と振向いてみると、それも浪人仲間らしいが、編笠を被つていて、眼の前に来るまで、誰とも判断がつかなかった。

『……や？』

然し、賛五郎には、何か心当りがあつたものとみえる。異様な顔いろの裡に彼の体は硬ばつていた。編笠の男は、じつと、その前へ来て突つ立つていた。

『おめずらしのう』

笠の紐を脱つた。

色の浅黒い、薄あばたの男だった。——然し、恰幅は賛五郎よりもずっと逞しくて、堂々として見えた。

賛五郎は唸くように……笠を脱ぐ相手の顔を凝視していたが、

『おう、大牟田公平か』

わざと、冷ややかに云つたが、声までが、硬ばつた舌に掠れて、重く聞えた。



『賛五郎殿、其許そこもとに、渡して上げたいものがあつて、急にここ迄追つて来た。——受け取つてくれるか』

『うむ。……渡す物とは、五年前の怨みか、刃やいばか』

『これだ』

公平が取出したのは、一握りの黒髪と懐劍かいけんだった。巻いてある白紙には、生々しい血しおが滲み出していた。

『……あつ？ これは』

『墨江殿のものだ』

『うぬつ、さては』

賛五郎の手が刀の柄つかに鳴った。公平は、その肱ひじを力まかせに横へ突き放して、

『世間知らずめ。相手違いをいたすな。下手人はこの男だっ』

云いざま、公平はびゅつと身を横に躍おとらせて、人垣を作りながら傍觀ぼうかんしていた仲間の一人を、不意討ちに、頭から斬きり下げた。

——わつと、血しおを浴びて打ぶつ仆たおれたのは、伏原半蔵だった。唐突だしぬけに、仲間の者を討たれたので他の人々も、

『何をするかつ、うぬつ』

柄先つかさきを揃そろえて、大牟田公平の前後をどつと囲んだ。

春風並木  
はるかぜなみき

『——待てつ、待たれい。委細いさいは後で話す。逃げ隠れする程なら、大牟田公平は、遙々はるばる、  
くにおもて  
国表くにおもてから出て来て、しかもここまで参りはいたさん。深い心底は、旧怨きゆうえんを捨て、  
以来不遇にあると聞いた旧友平田賛五郎に、今度の通し矢の機会に、ぜひ共汚名きよせを雪いで  
もらいたい——そして以前の藩地へ戻つてもらいたい——と、そう願ねがいにかけて出府して  
来たのである』

彼のことは、今人間を斬つたとも思えないほど物静かだった。喰い付くように、浪人  
仲間の眼は彼をにらみつけていた。まだ充分に、その人物なり云う意味うなずが領けないのであ  
った。

『——然し、そう拙者のみ思つても、賛五郎の方では何と思っているやらと、その気持も察しかねて、二、三日程、うろついている間に、取返しのかかぬ魔が入ってしまった。そこへ斬り捨てた伏原半蔵という魔ものでござる。魔ものの所為しよゐを、ここで、詳しくお話しする事は、自分として忍びない。……旧友の賛五郎と二人で話したい。後の始末もありますから、どうぞ各 は平田一名を残して、一足お先にお出立くだされたい。……必ず必ず、誓つて、平田賛五郎は後より各 に追いつかせます』

——云うに忍びない事情だというので、一同は得心して、賛五郎を残して先に歩き出した。

春風の果——並木の果へ——その一行の人影はもう小さくなった。黙然と、棒のように立っていた平田賛五郎は、突然、旧友の胸へ胸を打ぶつけて行って、

『公平、わかつた。……今わかつた、ゆるしてくれ。……墨江はやはり、おぬしの胸に抱かれていれば倅せだつたのだ。おれと墨江とは、恋に遊ぶ事だけ知って、世間に生きてゆく道は何も知らなかつた。今更いまさら、どう詫わびても追いつかないが、腹の癒いえる迄、存分に俺を打つとも斬るともしてゆるしてくれ』

男泣きに、男の胸へ、賛五郎は泣いていた。

その首を、ぎゅつと、強い力の中に抱きしめて、大牟田公平は、弟を叱るように云った。『馬鹿、馬鹿、いい事をして、泣くやつがあるか。御成敗は、俺はしないが、世間から受けたじゃないか。——この上は、ひとつ、三十三間堂から、いい弦鳴りを聞かせてくれ。そしてやはり帰る所へ帰ってくれ。——貴公の兄上、貴公の妹、それからあの老先のみじかい御老母。みんな待っているじゃないか。慥乎しろ、なんだ三十男が、少しばかり世間の浅瀬で溺れたからと云って——』

笑い交りに、公平は、まだ泣いている彼の背中を幾つも叩いた。

(昭和十二年三月)

# 青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・㊦ 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「婦人倶楽部 臨時増刊」大日本雄弁会講談社

1937（昭和12）年3月

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 死んだ千鳥

吉川英治

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>